みんなの特報班 真相追求

つながった縁 遺族判明

仏人男性 刀の持ち主捜し

日本人女性2人が協力 落札し入手 12月来日

競り落とした刀を手に笑顔を見せるミシェル・ラピニュさん（本人提供）

宇都宮政徳さんの氏名と住所が記された木札（ラピニュさん提供）

山下　恵理さん

中村　啓子さん（本人提供）

（1面から続く）

みん特に情報が寄せられた段階で刀の持ち主へは、あと一歩のところまで迫っていた。時を4月上旬までさかのぼる。（阪和舞）

木札に文字

日本が降伏する際に接収された刀という説明があり、写真には刀のさやに文字が書かれた木札が付いていた。

「愛媛縣東宇和郡田之筋村大字常定寺　宇都宮政徳」

日本語は分からないが、調べると、記されていたのは住所と氏名だと気づいた。

ラピニュさんは、職人技による繊細な工芸品など日本美術に関心が高かった。刀が日本人にとって重要な意味を持つと理解していたことから、「宇都宮さんは刀の返還を求めていたのではないか」と思い至り、家族を捜すことを決めた。

インターネットやフランスの日本大使館から情報を集め、日仏の交流団体の一覧を手に入れて持ち主捜しの依頼を30件ほど送った。なかなか手応えがない中、ラピニュさんの思いに呼応したのがフランス東部ストラスブール在住の打楽器奏者中村啓子さん（66）だった。

事態急展開

中村さんは、在仏欧日文化交流協会長も務め、日本とフランスの文化交流のイベントなどを手がけている。当初、持ち主捜しはある程度時間がかかると見越していたが、知人で高知市のマリンバ奏者山下恵理さん（45）と連絡を取った際に「そういえばこんな話がね…」と相談したことで、事態は急展開する。

ラピニュさんの思いを知った山下さんは「そういうことならぜひ協力します」と応じた。連絡を受けた4月20日はオークションが10日後に迫っており早速、関係先を調べ始めた。

山下さんは愛媛県遺族会や県歴史文化博物館、宇和島市の和霊小学校の校長を務めた宇都宮政徳さんの死亡記事があった。情報を基に4月22日、該当の住所を訪ねた。

応対してくれた女性に事情を説明し、刀の写真を見せると「父の字です」。政徳さんの次女潤子さん（67）

父の字です

山下さんが当たった連絡先の一つが愛媛新聞だった。みん特が過去の記事を調べると2003年、宇和島市の和霊小学校の校長を務めた宇都宮政徳さんの死亡記事があった。情報を基に4月22日、該当の住所を訪ねた。

応対してくれた女性に事情を説明し、刀の写真を見せると「父の字です」。政徳さんの次女潤子さん（67）は驚いた様子だった。市内の高齢者施設で暮らしていた妻淑子さん（98）にも写真を確認してもらい、政徳さんの刀であることが確実となった。

家族が見つかったという知らせは、山下さん、中村さん、ラピニュさんに驚きと喜びをもって受け止められた。

ラピニュさんは、宇都宮家に返還するため、刀をオークションにかけることを阻止しようと主催者に働きかけたがかなわず、入札に参加することに。

自宅から北に約500キロ離れた会場があるトゥールへ。競りの状況は、日本へもリアルタイムで伝えられ、ラピニュさんは最低落札価格を大幅に超える約6千万円（当時約80万円）で競り落とした。

広がる支援

ラピニュさんは、できるだけ早く来日して刀を家族に直接手渡したいと望んでいたが、新型コロナウイルスの流行に阻まれた。

この間、刀や渡航費の資金を集めるためインターネット上で寄付を募った。フランスの雑誌などで報じられたこともあり、隣町にある兵庫県西宮市との交流協会や、パリのオークションハウス「ドルオー」の会長ら多くの人から申し出があったという。

刀の輸送や所持に関する警察や行政との煩雑な手続きは、中村さんや山下さんが協力した。5月には中村さんと面会。親交を深めてきた。

新型コロナの水際対策緩和に伴い、ようやくラピニュさんの来日が決まった。12月5日から数日間の日程で宇和島市を訪れる予定で、淑子さんと潤子さんにお披露目し、政徳さんの墓前で報告することになっている。

刀剣類 廃棄や海外流出 文化庁

太平洋戦争で国民が所持していた刀剣類は、武器として連合国軍総司令部（GHQ）が接収した。文化庁によると、多くは廃棄されたり海外に流出したりした。

1947年、当時の国立博物館の職員の尽力で、GHQは集積された数十万本ともされる刀剣のうち、美術的価値があるものは所有者への返還を条件に日本側への引き渡しを許可した。集積場所の地名から、これらの刀は「赤羽刀」と称され、約1100本が所有者の手元に戻った。

戦後50年の95年には「接収刀剣類の処理に関する法律」が議員立法で成立。刀剣類の所有者は国に返還請求ができるようになった。東京国立博物館に保管されていた約4600本のうち、所有者が特定されたのは7本。残りは国に帰属し、全国の公立博物館の希望に応じて無償譲与するなどしている。

文化庁は、海外に流出した刀剣について把握していないが、今回のように接収された刀が海外のオークションなどで個人取引される例はあるとしている。

「生きていたら喜んだでしょう」

宇都宮さんの妻・淑子さん 会える日心待ち

夫の刀の帰りを待つ妻の淑子さん＝5月2日（家族提供）

終戦から長い月日を経て家族の元に返ってくる宇都宮政徳さんの刀だが、妻の淑子さんと次女の潤子さんによると、生前の政徳さんからの話を聞いたことはなかった。

家族が保管していた写真の中に、刀を携えた若い政徳さんの写真があった。裏には1945（昭和20）年6月5日の日付と「久留米第一陸軍予備士官学校卒業　陸軍少尉（21才）」と記されていた。潤子さんは兵籍簿も調べたが、卒業から終戦までの詳しい足跡は分からなかった。政徳さんは、宇和島市や愛南町の小学校で教員として長年子どもたちに慕われ、和霊小学校の校長で現役を終えた。

83年から約20年間、保護司を務めたほか、退職後は県文化財保護指導員として松野町の国史跡・河後森城跡の調査に携わるなど、地域の福祉や文化の向上にも尽力。2003年に78歳で亡くなった。

淑子さんは「よく気がつく人で、子どもを大事にしていました」と振り返る。教育への熱意は強く、退職後も政徳さんを慕う教え子が自宅によく集まってにぎやかだった。今でも教え子から淑子さんの様子を気遣う連絡が来るなど、交流が続いている。

刀の発見に、淑子さんは「生きていたらどんなに喜んだでしょう」と思いを巡らせる。夫の遺品が「77年たってこちらに帰りたかったのでしょう」と受け止め、縁を結んだラピニュさんと会える日を待っている。

陸軍予備士官学校を卒業したころの宇都宮政徳さん。右手で刀を支えている（家族提供）

2000年の正月に宇和島市内の写真館で撮影された宇都宮さん夫婦（家族提供）

【紙面編集】石村禎浩

リクエスト募集中

愛媛新聞「真相追求　みんなの特報班」は取材リクエスト、LINE（ライン）の友だちを募集しています。QRコードから、LINE公式アカウント【新】真相追求　みんなの特報班@愛媛新聞」に友だち登録し、リクエストをお願いします。記事へのご意見、ご感想もお待ちしております。

ホームページ（HP）「愛媛新聞ONLINE」に、みん特の特集ページ（https://www.ehime-np.co.jp/online/news/mintoku）を設けています。HPや郵便でもリクエストを受け付けています。

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。